

研究課題	科学における意識の問題への現象学的・唯識思想的アプローチと その現代的課題について
研究代表者	司馬 春英 (文学部 人文学科 教授)

1. 研究目的

本研究は、科学的な意識研究を、現象学・唯識思想を中心とした哲学的観点から検討することで、その問題点を解明し方法論を問い直すことを目的とする。脳科学をはじめとする自然科学の分野では、脳イメージング技術によって得られた神経処理過程と意識との対応関係や因果関係が探られている。神経処理と意識との対応関係や因果関係を明確にするためには、意識の主観的側面がいかにかに記述されるかの分析が必要であるが、意識経験を厳密に記述する方法についての議論は熟していない。そこで、本研究では、①意識研究が、意識の客観的側面と主観的側面との相違に起因する方法論的限界を持つかどうかについて検討する。それを厳密に、②現象学と唯識思想を加えた哲学的観点をもとに意識経験の記述方法について検討する。最後に③これらの探究で得られた意識の経験構造に関する記述をもとに新たな意識モデルを提案することを、本研究の目的とする。こうした探究を通じて、意識研究のさらなる発展に寄与し、意識についての現代的課題について考究できると考える。

2. 研究方法

意識の解明は、21世紀の科学に残された最大の未解決問題だと言われる。とくにめざましい発展として、脳イメージング(fMRI、PET)などの技術の発達により神経処理の過程が明らかになってきたことで、被験者自身が語る経験に依拠する形での実験が可能となってきたことが挙げられる。そのことで、意識経験に関する研究が飛躍的に進歩した。また、意識に対する自然科学的な探究においては、工学的な関心などから AI (Artificial Intelligence) 研究などによって、意識活動の再現などが目指され研究されてもいる。しかしながら、意識研究の大勢を占めている現在の科学的な探究方法が、意識の全容を解明しえるかどうかを解明しているといえるかどうかはいまだ明らかではない。科学的探究では、われわれが実際に(直接に)もつ意識経験について扱われることはほとんどないが、その状況は意識探究としては本末転倒だと言って過言ではない。「経験」に対する直接的で実践的なアプローチを欠いた今日の科学の研究スタイルは、意識の客観的な側面についてしか扱えないという意味で不十分なものである。そこで、意識の主観的・客観的側面の両方を扱うことができる意識探究の方法とは何かを探究する必要がある。

そのためには、科学的な意識研究を、現象学・唯識思想を中心とした哲学的観点から検討することで、その問題点を解明し方法論を問い直す必要がある。意識の研究が、意識の客観的側面と主観的側面との相違に基づく方法論的な限界を持つかどうかについて、現象学や唯識思想を代表とする西洋・東洋の哲学の観点から検討しつつ、意識経験についての記述方法を探究することで、意識の科学的探究を補填する。本研究ではとくに、認知科学の代表的な研究者で哲学にも通暁していた F・ヴァレラの研究を参照しながら研究を進めた。ヴァレラの研究は、仏教を基盤として認知システムを考えることで認知システムにおける意識の参与の仕方を見直し、生命活動における環境との相互作用を発見するなど極めて有効な成果をもたらした。本研究では、こうした研究を通じて、意識構造の新たな解釈に取り組むことを1つの指針としている。

3. 研究成果と公表

本研究会では、2018年度より研究課題を「科学における意識の問題への現象学的・唯識思想的アプローチとその現代的課題について」として、報告者を代表とし山口一郎、星川啓慈、臼木悦生、鈴木正見、渡辺隆明を分担研究者に加えて研究会を立ち上げ、大正大学より助成金を受け研究会を継続している。

前年度(2018年度)の研究会においては、まず手始めに現象学研究の現状を各研究者が知る上

で、『現代現象学』（植村玄輝他著、新曜社、2017年）やレヴィナスの『全体性と無限』を吟味しつつ現象学の方法論を検討した。また同時並行として、苧阪らによる社会脳研究について『社会脳シリーズ』（苧阪直行編、新曜社）の各論文を検討しながら、その社会的影響力と研究進度について情報を共有した。

年度の後半においては、意識研究についての共通理解を得るために、外部研究者を招聘し、鎌田康男氏（関西学院大学）からは「カント、ショーペンハウアー、フッサールと続く意識研究の変遷について」、頼住光子氏（東京大学）からは「道元と瞑想について」、合田秀行氏（日本大学）からは「仏教における瞑想とマインドフルネス瞑想：唯識研究の立場から」と題して講演を賜り、西洋、日本、インドに関連する意識研究について討議した。それらを通して、本研究会の現象学的・唯識思想的アプローチが意識経験を記述する方法論の探究に非常に意義があることが確かめられた。

本年度・2019年度の研究会では、さらに発展的に意識探究の方法について議論がなされ、主観的経験を説明する方法論に関する研究をおこなった。前半では、フッサールの現象学について、山口の『存在から生成へ：フッサール発生的現象学研究』（知泉書館、2005年）と『発生の起源と目的：フッサール「受動的総合」の研究』（知泉書館、2018年）に学びつつ、認識・経験の身体的側面について議論した。また、宗教現象学者のアルフレッド・シュッツが、フッサール現象学から引き継いだ現象学の「非基礎づけ主義」的な側面と応用可能性について検討を行った。

後半の研究では、ヴァレラによる議論と現象学に即した形で理論研究がすすめられた。同時に、前年度の意識研究をふまえ、現実の事例に言及しつつ新たな意識研究がすすめることができた。なお、計画では、最新の意識研究の情報を共有し、また、前年度と今年度の研究会での議論の成果をあとづけるために藤田正勝氏（京都大学）、護山真也氏（信州大学）、沖永宜司氏（帝京科学大学）、鎌田康男氏よりご講演を頂き議論することになっていたが、2019年末から蔓延が始まった新型コロナウイルスの影響により断念せざるをえなかった。そこで、研究会では、講演予定者には、講演予定であった内容をもとに文献情報を教授頂き、それに基づき研究を行った。

研究会では、2019年度の議論を通じて、様々な研究成果があがった。紙幅の都合上、以下には、主な研究成果として、理論的・事例研究を展開した星川、事例研究をすすめた渡辺、臼木によるものを挙げる。

星川においては、日本宗教学会での発表、出版（「シュッツ流の宗教現象学の可能性」、『アリーナ』（第22号、2019年）所収）がなされた。

渡辺においては、「仏教文化におけるメディア研究会」での発表、出版（「変容する妙好人像」、『メディアの中の仏教：近現代の仏教的人間像』勉誠出版、2020年所収）がなされた。

臼木においては、出版（「社会変動と地域回帰」、大正大学地域創生学部編『日本の明るい未来を切り拓く人材を養成 地域創生への招待』大正大学出版会、2020年所収）がなされた。

以上が本年度の研究成果の公表内容である。

研究会のうちで、とくに大きな成果は、星川による発表「シュッツ流の宗教現象学の可能性」である。同研究については、2019年8月に開催された研究会において、宗教現象学について言及しつつ意識を現象学的に解明することの理論的解明を行った。星川は、現象学はあらゆる前提をとりはらって探究を行うとみなされがちであるが、それは誤解であることを明らかにした。そのうえで、現象学の知見が宗教現象についても用いることができることを示しつつ、脳科学をふくめたその他の領域へも応用することができることを明らかにした。本研究会でのこの成果は、心の哲学など他の分野への応用の可否が問われ続けている現象学的方法の可能性を開くうえで、極めて重要なものである。

こうした議論については、さらに内容を拡充させたものを、2019年9月14日開催の日本宗教学会大会において「最近の『宗教現象学』をめぐるいくつかの問題」として発表された。同内容については、意識に対する現象学的なアプローチが、脳科学的アプローチを批判するばかりでなくその研究成果を参照しながら、意識モデルについてのさらなる哲学的探究を可能にする可能性を明白なものとした。こうした研究成果は、申請者による論文「シュッツ流の宗教現象学の可能性」が『アリーナ』（第22号、2019年）に掲載され、一定の評価を得ている。2020年度ではこう

した研究をもとに、意識探究の方法論を吟味する予定である。

なお、上記の星川の議論は、J. タケット氏による論文 J. Tuckett “The a Priori Critique of the Possibility of a Phenomenology of Religion: A Response to the Special Issue on ‘Schutz and Religion’, *Human Studies*, Vol. 42, 2019 に対し、批判を加えたものでもある。同論文は、星川と M. Staudigl 氏が 2017 年に *Human studies* 誌の特集 “Special Section: Alfred Schutz and Religion” (Vol.40, Issue 4, 2017) に掲載した論文 “A Schutzian Analysis of Prayer with Perspectives from Linguistic Philosophy” に対する批判論文である。英国の若手宗教学者で活発な活動を展開しているタケット氏によって、星川らの論文が *Human Studies* 誌上ですぐさま取り上げられたことは、同氏らの研究が非常に注目されていることの証左である。タケット氏に対し、再批判を加えた星川の研究は、こうした意味でも、今後、国内のみならず国外に対して大きな影響をもつようになるであろう。

次に、渡辺による妙好人に関する研究が「仏教文化におけるメディア研究会」（大正大学総合佛教研究所所属）において発表され（6月5日。発表タイトルは「妙好人の研究」）、後に論文「変容する妙好人像」として結実し『メディアの中の仏教：近現代の仏教的人間像』（森覚編著、勉誠出版、2020年3月）に掲載され発表された。同論文では、理想の宗教者像の探究を通じて宗教者の意識に対する解釈や宗教的現象・体験自体の捉え方が、時代的・社会的な背景によって変化するということを明らかにしている。この論点は、たとえば、研究が進めば宗教的現象・体験にたいしてより正当な評価を得ることができるであろうと考えることができるならば、些末なものに見えるかもしれない。しかし、このように意識内容に関して外部的な要因の影響を許容するのであれば、仮に心の哲学における心的内容の外在主義の立場などと結びつけて考えると、宗教者の意識のあり方にとって時代的・社会的影響はより本質的なものとして考えざるをえなくなる可能性があることが、渡辺の議論により示唆された。

さらに、白木は研究会での意識研究の成果の一部を利用して2020年1月に論文「社会変動と地域回帰」（『日本の明るい未来を切り拓く人材を養成 地域創生への招待』所収）を発表した。同論文では、近代における地方から都市への流れを社会変動の視点から考察し、現代における都市から地方への流れを地域回帰の視点から分析している。そこでは、欧米と日本の社会変動の違いを明らかにし、それによって都市と地方をめぐる社会構造の日本的な特徴を明らかにし、それによって生じる地域回帰の現象を考察し、来たるべき社会に対する提言を行なった。こうした議論を通じて、地域への帰属意識など社会構造が意識に作用する側面に関し知見を公表し、意識研究がもつ現代的な意義を明らかにした。

こうした研究活動のもと、本研究会の成果の発表を準備中である。次年度は、こうした研究成果を踏まえつつ、科学が意識の主観的側面を扱えるかどうかを占う意識の「ハードプロブレム」を検討しつつ、意識の主観的側面と客観的側面との関連付けの方法を探っていくこととする。また、一人称記述や三人称記述などによる意識経験の記述の違いについて検討し、意識の社会的側面について探究する。さらに、ヴァレラの思想を唯識思想と関連付けて、意識研究に対する唯識思想からのさらなる補完を行いつつ、新たな意識モデルを検討していくこととする。